

学位論文題目

A・ネスのエコソフィの自己実現を通じた環境認識の展開

- W・ジェームズのプラグマティズムを手がかりに -

論文提出者 藤井孝明

論文の要旨

本論文では、アルネ・ネス(Arne Naess)が提唱したディープ・エコロジー思想に着目し、ネスの環境哲学エコソフィーが提起する環境認識と人間と環境の関係性について取り上げている。そして、ウィリアム・ジェームズ(William James)のプラグマティズムの認識論を手がかりとして、エコソフィの環境認識論の弱点を補強するとともに、エコソフィにおける自己実現に焦点を合わせて、その可能性について考察していく。

まず第一章では、ネスのエコソフィの「关系的・全体的な場」という環境認識を取り上げ、生命圏平等主義や生態系の複雑性・多様性について考察する。次に、環境認識を「全体を捉える見方」や「关系的思考」に基づくものへと移行するために、ゲシュタルト的認識を取り上げる。そして、そのような关系的で全体的な見方や思考を有機的に導くために、認識主体の自己実現について論じる。自己や自己実現の意味を「深く」問い直すことによって、それらの豊かな意味が獲得することができるのであり、他の存在へ自己感覚を広げる「同一化」のプロセスを通じて、エコロジカルな自己の実現が可能となる、と考える。

次に第二章では、ジェームズのプラグマティズムの認識論を取り上げ、人間が現実世界をいかに認識するかについて「知覚と概念」、「因果性」の問題を検討する。そして、ジェームズの「一と多」、「連続と無限」の概念を通じてエコソフィの全体論的見方・考え方との関係について論じ、世界の全体性の認識について考察する。世界は、その捉え方によって「一」でもあり「多」でもあるのだが、それらは統一されているものであり、「全体性」の中に包括されている、と主張する。最後に、そのようなプラグマティズムの認識論から導かれる環境認識の機能的な価値について取り上げ、エコソフィに基づく自己実現に焦点を当てながら「行為の問題」について論じている。エコソフィにおける環境認識や自己実現の考えによって導かれる結果は、人間にとって有用なものであり、それを信じ、またそれに従って行動することが、私たちの実際の生活において価値あることとなる、と筆者は結論づける。

そして第三章では、プラグマティズムの認識論を受けて、ディープ・エコロジー思想の継承者であるワーウィック・フォックス(Warwick Fox)とフレイヤ・マシューズ(Freya Mathews)の「自己同一化」と「自己実現」の考え方を取り上げる。まず、フォックスのトランスパーソナル・エコロジーを取り上げ、「自己同一化」を導く「個人的」、「存在論的」、「宇宙論的」という三つの基盤について考察し、個人的基盤に立った自己同一化の背景として存在論的・宇宙論的基盤を置くことによって、偏りのないエコロジカルな自己感覚の獲得が可能になるとする。次に、マシューズの「相互連結性」について取り上げ、全体と部分の相互依存関係を明らかにする。相互連結性と利害関心の存在によって自己と他の存在の同一化がなされ、エコロジカルな自己の実現が導かれる、と考える。最後に、エコソフィに基づく環境認識と自己実現を通じた人間の実際の行動の問題について取り上げ、エコソフィとプラグマティズムの認識論との統合した行為論の展開を目指す。

以上のようにして、エコロジカルな自己の実現への努力は、私たちに現実生活において自発的な環境保護活動を導き、人間や他の生命が持つ潜在的可能性を展開することへと導く、と筆者は結論づける。